

第1回 河合隼雄先生追悼記念プログラム報告

ユング派心理療法をめぐる

講師：マーヴィン・シュピーゲルマン

話題提供：樋口和彦

日時：4月24日（金）16:20-18:20

会場：弘誓館 G103

河合隼雄先生記念行事 マーヴィン・シュピーゲルマン講演『ユング派心理療法をめぐる』によせて

臨床心理学部教授 名取琢自

2009年4月24日、京都文教大学臨床心理学部・河合隼雄先生記念行事の一環として、アメリカ在住のユング派分析家、マーヴィン・シュピーゲルマン先生（以下敬称を略します）をお迎えし、『ユング派心理療法をめぐる』という題で講演していただいた。司会には本学名誉教授・前学長の樋口和彦先生もかけつけて下さった。2時間じっくりと、ユング派夢分析を導きの糸として、運命的な人物との出会いが展開する物語に聞き入ることができた。通訳を務めた筆者からこの講演について報告させていただく。

実は本校でシュピーゲルマンに講演していただくのは二回目である。前回は2004年3月に『心的現実、いまむかし』というテーマで、多様な文化的背景をもつ参加者とのイメージ・ワークについて詳しくお話いただいた。

マーヴィン・シュピーゲルマンはスイス・チューリヒユング研究所でユング派分析家資格を研究所一期生として取得し、ユングから直接証書を受け取った後、分析家と被分析者の相互

作用に注目しながら、面接の中で分析家に生じてくることを積極的に開示する方法を深めてきた。氏の積極的な自己開示は、自らのアクティブ・イマジネーション記録や、自分がライヒ派の分析を受けた体験まで本にして公表していることにも現れている。また、多様な宗教的・文化的背景の人々との相互理解を深めていく仕事も精力的に続けている。ユング派分析家としては、芯の通ったラディカルな人物として、畏敬の対象となっている。氏の相互作用の視点は著書 "The Divine WABA"（聖なる空間）（2003）にまとめられている。

日本では、河合隼雄がスイス・チューリヒユング研究所に留学することを方向づけた運命の人物としても有名である。河合はフルブライト奨学生としてUCLAのクロッパーに師事してロールシャッハテストを学ぶなかで、師のなかでユング心理学が大きな意味を持っていることに気づき、ひょんなことからユング派の教育分析を受けることになった。その最初の分析家がシュピーゲルマンだった。もしこの出会いがなかったなら、河合がユング派分析家になることもなかったかもしれない、日本の心理臨床も全く異なった姿になっていた可能性が大きい。

講演ではシュピーゲルマンがユング研究所で第一期生として分析家資格を取得するに至った経緯から語られた。一連の経緯と夢については、後日、日本ユング心理学研究所で開催されたセミナーの記録にも同じ内容が語られており、これは『臨床家 河合隼雄』（2009）に掲載されている。また河合の視点からは『未来への記憶－自伝の試み－』もある。詳しくはこれらを参

照していただくこととして、本稿ではそのごく一部を紹介する。

シュピーゲルマンがユング心理学と出会った経緯も、河合と同様、偶然に導かれたものであった。学生時代に心理学を勉強するなかで、当時の心理学に色濃かった客観的、合理主義的、法則定立的な方向性への偏りに物足りなさを感じていた。ある日、「批判的心理学」という科目で、高名な教授が「やがては美の感じ方についても公式が発見されるでしょう」と発言したのを聞いて、氏は「そんなのナンセンスだ！」と反発し、試験でも批判的なことを書いたという（幸いその先生は紳士的で、単位は出してくれたそうだ）。その頃講義でたまたま隣り合わせた男性がユング派の分析家(Max Zeller)だった。ツェラーはユングとナチズムとの関係についてシュピーゲルマンが抱いていた懸念を解いてくれ、自宅に招待してくれた。ツェラーの家を訪れると、美術品や音楽に満ちたヨーロッパ的な空間だった。その心地よい雰囲気の中で、夢やファンタジーについての話を聞くなかで、シュピーゲルマンは、自分が求めていたものによりやく出会えたと感じた。そして、ユング派分析家への扉が次々と開いていく。スイス・チューリヒでの教育分析はC.A. マイヤーに受けたのだが、最後の面接で報告した夢にはその後の人生の見取り図が描かれていたかのようであった。夢の前半で、シュピーゲルマンは分析家マイヤーと相撲のようなレスリングをして、取っ組み合いになる。二人の身体にはエネルギーが満ちてきて、光と熱が放射される。試合が終わるとシュピーゲルマンはマイヤーに礼儀正しく目礼をして面接室を後にする。筆者には、この取っ組み合い自体が、シュピーゲルマンの生涯の研究モチーフである、相互的過程 (mutual process) を表しているようにも思われる。ここで発せられる熱と光というすさまじいエネルギーが何よ

りも印象深い。夢は屋根のない不思議な建物で天空の精霊たちと議論しながら著述に熱中する場面を経て、スイスとの別れ、アメリカへの帰国の道りを暗示する場面へと続いて行く。空を飛ぶ船でスイスから南下した後、アメリカでは船はトラックに変身する。最後に辿り着いたのは西海岸のサンタモニカである。そこでシュピーゲルマンは船長と二人で、西から上る太陽を見る。

この太陽が、河合隼雄との出会いの予感をもたらしたのだが、河合が分析家資格論文でアマテラスという太陽神を主題に選んだことからしても、夢のイメージの的確さに驚かざるをえない。この夢を見たのはシュピーゲルマンが河合に出会う九ヶ月前のことだという。それであらかじめ、東洋からすごいエネルギーと可能性を持った人物が訪れてくるかもしれない、とこころの準備をしていたという。

講演では、河合隼雄との出会いの瞬間が生き生きと語られた。ユング派の分析を受けたいのか、とクロッパーに聞かれて「日本人らしく」イエスと言ってしまった河合はシュピーゲルマンと面会する羽目になるのだが、最初は夢を素材とすることに懐疑的だった。そんなことは「科学的でない」と言う河合に、シュピーゲルマンはすかさず、「科学的でないという証拠はあるのか。科学的というのは経験を重んじるということのはずだ。経験したこともないのに否定することこそ、科学的でないじゃないか」と反論した。河合はなるほどと思って、試しに夢を検討することになった。このエピソードにも、二つの個性が出会うべくして出会った深い意味を考えさせられるものである。なぜなら、ユング派分析家にも様々な個性があり、シュピーゲルマンのように即座に論理的反論ができる人ばかりではないからである。前述のように、シュピーゲルマン自身が、現代心理学を学ぶ努力もした

上で不十分な点を批判的に検討し、表現してきた人だからこそ、河合の疑念をただ否定するのでも、受け流すのでもなく、きちんと論理的に反論しえたのだ。心理臨床面接では、時にこのように、一瞬のうちに「百点満点」の返答をしなくてはならない場面があるのだが、河合隼雄という強烈な個性（そして当時は科学的であることへのこだわりは西洋人以上のものがあつたという）を受け止めて、しっかりとレスリングができたシュピーゲルマンの凄さを感じさせられる。そして、ただ力対力の取り組み合いではなく、パラドックスを楽しむユーモアの風味も添えられている点を見逃すべきではなからう。

シュピーゲルマンとの教育分析のなかで、河合は「ハンガリーのコイン」の夢を見た。ハンガリーは東洋と西洋の中間点に位置する国であり、コインはユング心理学のもっとも重要な鍵概念である象徴（symbol）の語源（ともに投げる、一致する）にも通ずるイメージである。東洋と西洋の間を、象徴という観点から関係づける仕事がよく表されている。

また、河合の夢に“truth lies here”という言葉が出てきた話をシュピーゲルマン夫人がとても気に入って、この言葉を記したプレートを作ってプレゼントした。後に河合がウソツキクラブを設立した際は、この功により、夫人はウソツキクラブ役員に任命された。

この言葉は「真実はここにある」とも、「真実はここで嘘をつく」とも読める、いたずらっぽい言葉なのだが、ただの冗談にはとどまらない含蓄もっている。真実はとても重いもの、研究者が求めてやまないものである。その探求に必死になるのは研究者として当然ではあるが、ただただ真面目に迫ればよいというものではない。時として、これまで正しいと思っていた視点とは違う新しい視点に立って、物事を見直していくことが必要となる。そのとき、真実

は「嘘をつく」ことで、より大きな真実を見る目を開いてくれるのだ。ユングがいちばん嫌つたのは一面性と教条主義であるが、この言葉は一面化しつくすことの愚かさを見事にユーモアの力で笑い飛ばしてくれている。2009年10月31日には本学で河合隼雄先生を偲ぶ記念植樹が行われたが、碑文にもこの言葉が刻まれている。

講演会には学生、院生、教職員が多数参加し、盛会となった。会の終わりにある大学院生がC.A.マイヤーを愛読していることを発言した。シュピーゲルマンは、「そういう方がいてくれてうれしい。マイヤーはもっと注目されていい分析家なので、これからどんどん読んでください」と声をかけられた。率直で力強い声だった。

講演会に先立ち、午前中にシュピーゲルマン夫妻、樋口和彦と筆者は奈良の河合隼雄の墓を訪ねた。墓参後、駐車場から東大寺に向かう途中で、空を見上げた樋口が「あ、虹だ」と指さした。確かに、太陽の周囲を虹が一筋、円を描いている。シュピーゲルマンはその光景に深く感じ入っておられた。この虹についてシュピーゲルマンは帰国後も様々な機会に言及しているとのことである。

京都文教大学は世界的なユング派分析家が来日の際に立ち寄り一拠点となっている。これは河合隼雄、樋口和彦はじめ、本学の基礎を築いた先生方の導きのおかげであるが、これからも世界のユング派からの注目と期待に応えていける場であり続けたいものである。

参考文献

- 河合隼雄 2001 未来への記憶－自伝の試み－、下、岩波新書
- Spiegelman, M. J. 2003 The Divine WABA (Within, Among, Between, Around) : A Jungian Exploration of Spiritual Paths. Maine:Nicolas-

Hays.

谷川俊太郎・鷺田清一・河合俊雄（編）2009 臨床
家 河合隼雄 岩波書店